

令和元年度第2回きのくにコミュニティスクールの推進に係る 研修会（紀北会場）

1. 日 時 令和元年7月2日（火） 14時00分～16時30分
2. 場 所 那賀総合庁舎3階大会議室
3. 参加者 小学校、中学校、高等学校、特別支援学校の学校長及び教頭
市町村教育委員会きのくにコミュニティスクール担当者等 合計81名

4. ねらいと成果・課題

（1）学校と地域をつなぐ校内体制づくりの方法について学ぶ

- ・各学校で取り組んでいる地域と連携・協働した活動を基盤として、コミュニティ・スクールの取組に対して、全教職員が関わることの重要性を学ぶことができた。まず、全教職員がコミュニティ・スクールの仕組みを理解することが必要である。

（2）コミュニティ・スクールを効果的に、長続きさせるための工夫について学ぶ

- ・学校と地域の共通理解が進むような「仕掛け」を工夫し、実情に応じた「持続可能な取組」から始めることが大切であることを学ぶことができた。
また、課題として、各種団体との連携や次世代の育成等、多くの地域住民の協力を得ることが必要であると考えた。

（3）地域と連携、協働した学校運営に活かせるヒントについて学ぶ

- ・「地域から必要とされている学校」、「学校から必要とされている地域」といった関係性を構築することが、地域と連携、協働、融合した学校運営につながることを学ぶことができた。地域と学校が本音で語り合う場（共育ミニ集会等）を有効活用することが必要である。

（4）地域内での小・中学校と高等・特別支援学校の連携が進む工夫について学ぶ

- ・地域内で合同の学校運営協議会の開催や各学校運営協議会の会長同士の交流、保育園、小学校、中学校、県立高等看護学院の交流等、「縦や横のつながり」を工夫することで、各学校運営協議会間のつながりができ、連携が促進することを学んだ。そのような取組はまだ一部の学校に限られている。

5. 研修内容 「地域とともにある学校づくり

～コミュニティ・スクールのマネジメント力の向上～

◆事例発表

「コミュニティ・スクール立ち上げに向けた地域との関係づくり」

岩出市立岩出小学校 校長 原 寿宏 氏

○学校と地域との関係づくりのために取り組んでいること

- ・青少年育成協会等の団体、放課後子ども教室や登下校の見守り等で学校に関わってくれている方を中心とした「学校の応援団」を立ち上げた。
- ・「学校の応援団」の方々と児童が顔見知りになるための仕掛けとして、応援団の方々の顔写真と名前を職員室前、児童玄関前の廊下に掲示した。
- ・岩出小学校のコミュニティ・スクールがスムーズにスタートするために、前年度に地域の方々や保護者、教職員等が集まり、岩出小学校の子供たちのために意見を話し合う「共育座談会」を開催した。
- ・地域の方々に学校の様子を知ってもらうため、応援団の方々にも「学校だより」を配布したり、マスコミを活用したりするなど情報発信に努めている。

○今後に向けて

- ・少しずつではあるが応援団の人数が増加してきている。それぞれの方が「無理なく」、「できる範囲で」活躍できるよう工夫する必要がある。
- ・今後も地域の方々と教職員のつながりをより深めるために、学校開放月間等に「共育座談会」を開催し、本音で話し合える関係性をつくっていく。
- ・管理職だけでなく、全教職員がコミュニティ・スクールについて理解することが必要である。

◆講演

「学校は何のためにあるのか！ 校長への期待と危惧
～子ども達の未来を拓くコミュニティ・スクール～
鳥取県南部町教育委員会 前教育長 永江 多輝夫 氏

○「きのくに共育コミュニティ」を基盤とするコミュニティ・スクールへの移行10の提言

- ①コミュニティ・スクールの理念や法改正の背景をしっかりと考える。
- ②校長の認識と姿勢が問われている。なぜ、コミュニティ・スクールなのか真摯に向き合い考える。
- ③コミュニティ・スクールは、「学校改革」である。他で代替えはできない。
- ④コミュニティ・スクールの成否は、学校経営の責任者である校長次第である。
- ⑤学校経営方針の「承認」が肝心である。学校、住民ともに越えなければならない高い壁があることを理解し合いたい。
- ⑥「めざす子供像」について学校と住民が熟議、共有することが大切である。
- ⑦「承認」行為は、学校と住民が「横の関係（協働の関係）」でつながることである。
- ⑧子供たちの未来を拓く熱い想いでつながる学校運営協議会でありたい。
- ⑨コミュニティ・スクールは「手段」。学校の設置者である住民と熟議を活発にしたい。
- ⑩「努力義務化」はやるかやらないかではなく、いつやるか、どれだけ“本気で”やるかが問われている。



○今後に向けて

- ・学校教育と社会教育との連携→協働→融合へと移行する流れが必要。
- ・地域住民は熟議が苦手であり、校長のファシリテーターとしての役割や熟議を仕掛ける仕組みづくりが鍵となる。
- ・先進事例に学ぶだけではなく、地域の特色にあった校長としての課題意識が必要である。

◆協議

「地域とともにある学校づくり～コミュニティ・スクールのマネジメント力の向上～」

①コミュニティ・スクールに取り組む上で、最も大切にしていること

- ・コミュニティ・スクールの意義の周知
- ・長続きするためWinWinとなる取組
- ・無理しない関係を続ける
- ・学校の課題を地域の方々に知っていただく など

- ② Keep (維持できていること)
 - ・当たり前のように地域の人が来校
 - ・課題を報告、共有
 - ・各学校運営協議会会長が集まる会議の開催
 - ・学校とコミュニティ・スクール推進員との連携 など



- ③ Problem (改善が必要な問題点)
 - ・次の世代のメンバーへの引き継ぎ
 - ・心理的な敷居の高さ
 - ・学校職員全体のものとなっていない、まだまだ管理職主体
 - ・学校運営協議会間の横のつながり など

- ④ Try (コミュニティ・スクールで試してみたいこと)
 - ・小中高の学校運営協議会を合同で開催
 - ・コミュニティ・スクールと共育コミュニティとの連携強化
 - ・中学校区で夏期研修実施、コミュニティ・スクールと共育コミュニティの活動例の共有
 - ・コミュニティ・スクールによる働き方改革、まちづくりへの参画など

6. 参加者の声 (アンケートより)

- ・他の学校においても、同じ問題点があると思った。校長としてさらにCSを充実・深化させていきたい。
- ・今年、校長として初めてコミュニティ・スクールに関わる。第1回の学校運営協議会が終わり、8月末の第2回に向けて、仕掛けを考えている。テーマは「エリアネットワークの構築」。学校も委員の方とも楽しみながら地域を巻き込めたらと思っている。越えなければならない壁は多いが、楽しみたいと思う。
- ・いかに学校が地域から信頼を勝ちとるか、いかに学校が地域の一部となり得るかが、校長、教頭の手腕にかかっていると思う。システムとしてCSを創り上げていくことよりも、教員と地域をどう結び付けていくかが重要である。その上で、学校の課題を地域の課題として、捉えていくことが大切だと思う。

